

学校研究 筑波大学附属桐が丘特別支援学校におけるオリンピック教育の取り組み

著者	宮内 綾香
雑誌名	研究紀要
巻	52
ページ	3-11
発行年	2016-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151849

筑波大学附属桐が丘特別支援学校における オリンピック教育の取り組み

宮内 綾香

I. オリンピック教育とは

2010年、筑波大学は嘉納治五郎の生誕150周年を記念し、「オリンピック教育プラットフォーム(CORE: Center for Olympic Research and Education)」を設立した。COREは、日本初となるIOC(国際オリンピック委員会)認可のオリンピック研究センター(Olympic Studies Center)として、オリンピック教育を次のように定義し、オリンピック教育の研究・実践を推進している。

オリンピック教育とは、スポーツやオリンピック(パラリンピック等を含む)を教材として、国際的な視野に立ち世界の平和の構築に貢献する人材を育成する教育的活動のことである。より具体的な実践内容は、以下の3つに大別できる。

- オリンピックの理念(オリンピズム)とその歴史の学習
- オリンピックに関連した世界各国・地域の文化や社会問題等に関する学習
- オリンピックの精神やスポーツの価値(スポーツを通して共通にみられるポジティブな価値観)についての学習

3つ目に示されているスポーツを通して共通にみられるポジティブな価値については、IOCのオリンピック教育の教材作成プロジェクトであるOVEP(Olympic Values Education Pro)により、以下の5つのオリンピックの価値が示されている。IOCでは、オリンピック教育の柱としてこれらを掲げている(Binder, 2007)。

- 「Joy of Effort(努力の喜び)」
- 「Fair Play(フェアプレー)」
- 「Respect for Others(他者への尊敬)」
- 「Pursuit of Excellence(卓越性の追求)」
- 「Balance between Body, Will and Mind(バランスのとれた身徳知)」

真田(2012)は、このような社会生活において重要な価値観を理解し、実践することを通して、国際理解や異文化理解を深め、国際平和に寄与し得る人材を育成することが、オリンピック教育の目標であると述べている。

筑波大学附属桐が丘特別支援学校(以下、当校)では、COREのオリンピック教育の定義やIOCのオリンピックの価値を踏まえ、各教科、道徳や総合的な学習の時間、特別活動において、在籍する児童生徒の実態に応じて行っている。当校の児童生徒が実感をもって学ぶためには、「実体験を伴うこと」や「身近に感じること」が重要であり、このことはオリンピック教育においても同様である(花岡, 2014)。ここでは、その取り組みの一部を紹介する。

Ⅱ. オリンピックの理念(オリンピズム)とその歴史の学習

オリンピックの理念(オリンピズム)やその歴史については、中・高等部の体育理論で扱われる内容である。公益財団法人日本オリンピック委員会のホームページに、オリンピズムに関するページが設けられており、そこには、NPO 法人日本オリンピック・アカデミー監修の「オリンピズムってなんだろう」というページがある(図1)。オリンピズムについて、会話形式でわかりやすく説明されているため、こちらを教材にしてオリンピズムについての学習を行った。

オリンピック憲章を読み解きながら、オリンピックの歴史、オリンピズムを学び、オリンピックが単なるスポーツイベントではないということを認識することができた。さらに、オリンピックにおける政治や経済、人権等の諸問題を深く扱っていくにあたっては、他教科との連携も視野に入れ、オリンピックを教材として活用し、授業を展開していくことが今後の課題の1つと考えられる。

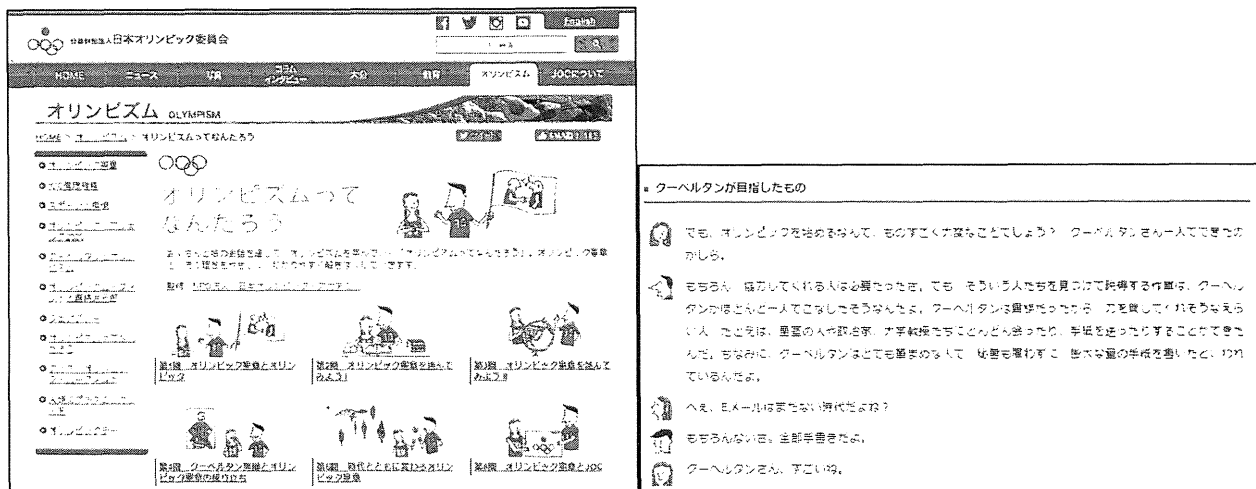


図1 NPO 法人日本オリンピック・アカデミー監修「オリンピズムってなんだろう」ページ

Ⅲ. オリンピックに関連した世界各国・地域の文化や社会問題等に関する学習

1. 一学級一国運動

第18回冬季オリンピック競技会の開催地に長野が選ばれた際、長野国際親善クラブ会長小出博治氏の発案により、子どもたちの国際感覚を育てる運動「一校一国運動」が長野市の学校で実施された。2年間に及ぶ交流活動は、まずは相手国の歴史や文化の学習、日本に住んでいる相手国の人を招いて交流を行うなどであった(長野市校長会・長野市教育センター国際化教育研究委員会編, 1999)。長野での一校一国運動を参考に、当校でもこのような活動に取り組み、異文化・国際理解の意識を高めることはできないかと考えた。

当校は、見学・研修等のため年間数十か国から海外の方々が来校され、交流する機会がある。その際には、交流する主な学部や学年が事前に来校者の出身国に関する情報(挨拶の言葉・地理上の位置・食事など)や国旗の確認を行っている。形式は異なるが、長野で行われた一校一国運動のような活動がこれまでに行われている。そこで2015年度においては、これまでの活動に2016年及び2020年の「オリンピック・パラリンピック」という視点を加えて一学級一国運動に取り組んだ。

一学級一国運動をするにあたり、まず体育の時間において、オリンピック・パラリンピックの歴史や理念、2016年リオデジャネイロオリンピック・パラリンピックや2020年東京オリンピック・パラリンピックの話題に触れる機会をもった。児童生徒の実態に合わせて内容を工夫し、オリンピック・パラリンピックに関する知識を深め、異文化・国際理解に関心を向ける契機とした。

次に、児童生徒にとって身近な国々や見学・研修等で来校される海外の方々の出身国、社会科地理的分野で扱われる国々との関連を考え、社会科教員と連携して各学級が担当する国を決定した。具体的には、隣国の韓国、中国をはじめとするアジアの国々、アメリカ、イギリス、フランス、オーストラリア等の比較的良好に耳にする国々である。決定後は各学級担任に一学級一国運動を委ね、朝の会や帰りの会、給食の時間等の学級での時間を活用し、学級の実態に応じた内容で展開された。具体的には、その国の衣食住やスポーツ等の話題に触れる、国旗を調べる、国歌を聞く等の活動で、興味関心を高め、異文化・国際理解を深めようとする取り組みである。

真田ら（1999）が行った長野の生徒たちに対するアンケート調査によると、一校一国運動に参加した生徒は、参加しなかった生徒より、友好意識、平和意識、異文化理解の意識の点で、より高い数値を示したことが報告されている。また、その後も一校一国運動を推進している教員は、一校一国運動の意義として「子どもたちと教師が共に学ぶことができること」を挙げている（日本オリンピック・アカデミー、2008）。当校においても児童生徒と教師が共に学ぶことができるよい機会となったと考えられるが、学級担任の意識や意欲により各学級の学級一国運動の質に違いがみられたことが今後の課題である。

2. 給食

2016年リオデジャネイロでオリンピック・パラリンピックが開催されることを踏まえ、栄養教諭と連携し、給食の献立にブラジル料理を取り入れた。献立は、ブラジルの家庭料理「ガリニャーダ」、豆と豚肉、牛肉を煮込んだブラジルの味噌汁ともいわれる「フェイジョアーダ」、ブラジルが生産量世界第1位の「オレンジ」、(牛乳)で、ブラジルの食に関する給食新聞を学級に配布した(図2)。実際にブラジル料理を体験することで、味の違いや食べ方の違い等について実感をもって理解を深めることができた。

今年は、ブラジルの リオデジャネイロで、オリンピック・パラリンピック が行われますね！

今日は、そんな ブラジルの 料理が登場します。

ブラジルの“食”について
(現地 ブラジルの 大川原 先生より 教えていただきました！)

みなさんお元気ですか？今日は、ブラジルの食について紹介します。
ブラジル人は、右手にフォーク、左手にナイフを持って食べます。(我々とは逆ですね。)
出された料理を自分のお皿に取り分けて食べます。
日本料理なども広く流通しており、食材が売られ、レストランもたくさんあります。

ブラジルのおみそ汁と言われる「フェイジョン」は、豆の煮込みです。
日本のおみそ汁と同様に、家庭やお店、地域によって味が若干変わります。
「フェイジョアーダ」はフェイジョンにお肉を入れて一緒に煮込んだもの。
ちょっと贅沢なフェイジョン(みそ汁で言えばとん汁?)といったところでしょうか。
初めて食べた時は、そんなに美味しいかな?と思いましたが食べているうちに
病み付きになりました。ブラジルのお米(蒲米)にかけて食べると最高です！
レストランやバー(居酒屋)で定食を注文するといえます。

また、ブラジルでは日本で食べたらいくらするんだろ?というような肉厚なお肉が
リーズナブルな値段で食べられます。そして、とっても美味しい！
肉好きにはたまらない国です。外食では意識していないと、野菜を口にする機会は
少ないです。気をつけないと写真のように、茶色ばかりで埋め尽くされます。
絹が丘の皆さんは、お肉もお魚も野菜もバランス良く美味しく食べましょう！

1月25日(月)の献立

ガリニャーダ
(ブラジルのチキンライス)

オレンジ

牛乳

フェイジョアーダ

ガリニャーダ
・・・ブラジルの家庭でちょっ
とした集まりの時に、作るこ
とが多いそうです。最近では
作る人も減っているそうです。

フェイジョアーダ
・・・豆と豚肉、牛肉を
煮込んだ料理。一般的には、
食卓にのせて食べるそう
ですが、今日は、白インゲン豆
で作っています。

オレンジ
・・・昔から、ブラジル
が生産量1位なの
がオレンジ。
ブラジルでは朝晩もた
くさん食べられます。




図2 給食新聞

IV. オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習

当校の体育の授業では、すべての単元を通じて、IOC が示すオリンピックの価値を意識して指導を行っている。ここではそのなかでも、運動会、中・高等部のすべての生徒が参加する東京都障害者スポーツ大会、高等部のハンドサッカー部活動、フェアプレイの学習を中心に紹介する。

1. 運動会

当校の運動会は、在籍する児童生徒の実態に差があるため、本校と施設併設学級で分けて実施している。ここでは、本校の運動会での取り組みを紹介する。運動会は、日頃の体育の授業での成果を発揮する場であると同時に、学年の枠を超えて他学部他学年との交流が深まり、互いに刺激を受ける貴重な機会となっている。

(1) リレー

なかでも、熱戦で観客を沸かせるのが紅白リレーである。小学部高学年、中学部、高等部のそれぞれで紅白リレーを行っている。体育の陸上競技の単元で取り組んだリレーの成果を発揮する場である。小・中学部の児童生徒は、高等部の生徒のリレーを憧れや尊敬のまなざしで応援している様子がうかがえる。小・中学部の児童生徒にとっては高等部の生徒が目標になり、高等部の生徒にとっては後輩たちの見本になりたいというモチベーションになっている。

さまざまな障害のある児童生徒が、走りながらバトンパスをすることができるようバトンの受け渡し方を工夫することで、リレー本来の面白さ、醍醐味を味わうことができる。例えば、バトンを保持したまま車いすやウォーカーで走行しようとすると、バトンを落としてしまったり、車いすやウォーカーの操作がしにくくなり全力で走行できなかつたり止まってしまったりする。そのため、箱（ペットボトルやプラスチックのボックス等）を車いすやウォーカーに取り付け、バトンを入れておけるようにしている。また、箱を使用し、前の走者に箱の中にバトンを入れてもらう、次の走者に箱の中からバトンを取ってもらうことで、上肢を動かすことが難しい児童生徒も参加することができる（図3）。

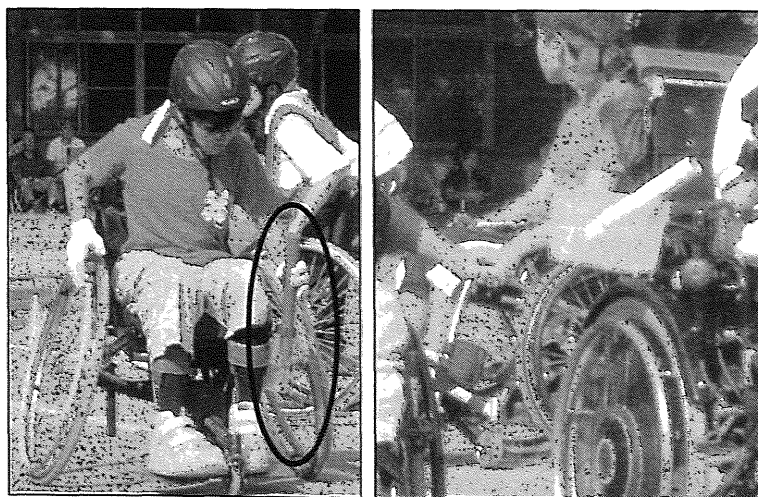


図3 バトンケース(右:ボックス 左:ペットボトル)

次に走りながらスムーズにバトンパスをするためには、前の走者のマーク通過を確認し、タイミングよくスタートすること、そのマークの位置の調整、併走、バトンパスのタイミング等が関係してくる。前の走者のマーク通過を確認しタイミングよく走り出す練習や、バトンゾーン内でバトンを渡すためのマークの位置の調整、バトンを持つタイミングなど繰り返し練習する。このように、児童生徒はいかに走りながらスムーズにバトンパスをしてタイムを短縮することができるかを追求し、その成功が努力の喜びにつながっている。

(2) 小学部集団種目「Kids a small world」

近年、国際教育の視点から国旗を使用した競技を行っている。2015年度それにあたるのが小学部1・2年生の集団種目「Kids a small world」である。これは、五輪のマークが描かれた大きな旗に、リレー形式で国旗を貼りつけていき、制限時間内で貼りつけることのできた国旗の数を競う競技である。

世界のスポーツの祭典であるオリンピックのシンボルは、学校のスポーツの祭典である運動会にもふさわしいものと考え、大きな旗の中心に五輪のマークを描いた。五輪のマークは児童にとって非常にシンプルで視覚的にわかりやすい。また、五輪のマークは五大大陸の団結を意味していることから、運動会に向けて児童の団結を深める活動として、五輪のマークを児童が手形で作成した。

競技では、小・中学部で行った一学級一国運動の国々の国旗および高等部において例年行われている国際交流の交流先の国々の国旗を使用し、競技に出場する学年だけでなく応援する児童生徒も視野に入れ、他学部他学年の取り組みとの関連づけを試みた。このように、日常における学習や体験が、運動会に取り組むための児童生徒の動機づけになっている。



図4 小学部集団種目「Kids a small world」の様子

2. 東京都障害者スポーツ大会

例年、中・高等部のすべての生徒が東京都障害者スポーツ大会の陸上競技に参加している。4月から6月初旬の大会当日まで、体育の陸上競技の単元のなかで練習を積み、その成果を発揮する場となっている。大会当日は、普段走ることのない陸上競技場で競技できるとともに、さまざまな障害者としてさまざまな競技レベルの選手と競技を通して交流を深めることができる機会となっている。また、競技結果によっては表彰式でメダルが授与され、さらに10月に行われる全国障害者スポーツ大会の東京都代表に選出される可能性もある。多くの生徒がこの東京都障害者スポーツ大会を楽しみにしており、毎年それぞれが目標を持って3年間または6年間積極的に取り組む生徒の様子がみられる。競技を終えた生徒の表情はとても晴れやかで、自信になっている生徒が多いと感じる。自己記録の更新、メダルの獲得、そして東京都の代表など、それぞれの目標に向かって練習に取り組むなかで、生徒が卓越性を追求したり、努力することの喜びを味わったりすることができるのではないかと期待している。

また、2013年には、高等部世界史のギリシャの単位と関連させて、オリンピックの理念や古代オリンピックと近代オリンピックの実施競技の違いなどについて学習をした。その上で、東京都障害者スポーツ大会の時期に合わせて「東京都障害者スポーツ大会で1位をとるためにドーピングをしたいと思うか」、「なぜスポーツ選手は勝つためにドーピングをするのか」など自分自身のことと関連させて考え、ドーピングがフェアプレイを阻害している一因となっていることについても学習を深めることができた（花岡、2014）。



図5 スラロームの様子



図6 メダル授与の様子



図7 走競技の様子

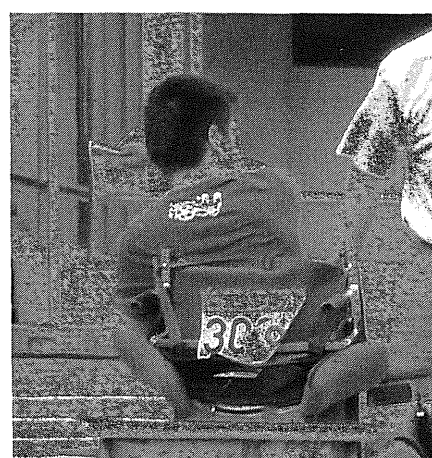


図8 投競技の様子

3. 高等部ハンドサッカー部活動

例年2月に、東京都の肢体不自由特別支援学校が集まり、東京都肢体不自由特別支援学校ハンドサッカー大会が行われる。この大会に向けて、当校の高等部では年間を通じて活動を行っている。コートや道具の準備をしてくれている人の存在があって大会が成り立っていることを意識し、年度はじめは部員でコートをつくることから始まる。よりよい成績をおさめるために、チーム一丸となって練習に励むことが、卓越性の追求や努力することの喜びにつながっている。また、日々の活動や他校との練習試合を通して、チームで協力する態度や公平に試合にのぞむ態度など、他者への尊敬やフェアプレイについても指導を行っている。



図9 チーム一丸となって試合にのぞむ

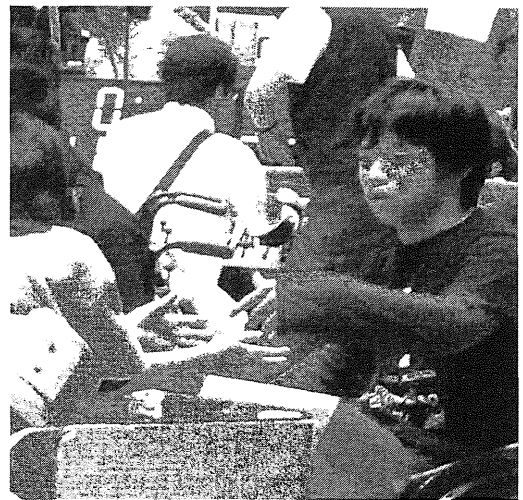


図10 対戦相手との握手

4. フェアプレイ

体育で扱われる教材は、2学期から3学期にかけて集団競技が中心になっていく。小・中学部の児童生徒の様子をみていると、仲間同士でミスを責め合ったり、相手に対する攻撃的な言動がみられたり、思い通りにいかないことがあるとすぐあきらめてやる気のない態度で試合に臨んだりという場面は少なくない。スポーツに対する場面に限らず、日常においてもこのような場面は多々みられる。そこで、オリンピックを教材に、フェアプレイの学習を試みた。公益財団法人日本体育協会のホームページに、フェアプレイについてのページが設けられている。そこには、フェアプレイの意味を凝縮した「フェアプレイ7カ条」が制定されており、とてもわかりやすくまとめられている（図11）。授業の前に確認したり、ゲーム中などに指導したりする際の確認に役立てている。また、同ホームページのフェアプレイストーリーから、児童生徒の実態に合ったストーリーを抜粋し（図12）、自己の言動をふり返り、日常に活かすという活動を行った。

その結果、ミスをしてしまった仲間に対する声かけが肯定的な励ましに変わってきたり、仲間や対戦相手を尊重できるようになってきたりと、児童生徒の言動に変化があった（図12, 13）。雰囲気がよくなることで、うまくいかなくても挑戦できる環境、最後まで全力でプレイできる環境になってきたと考えられる。また、この変化は、日常のさまざまな学習や経験から生じた変化であり、さまざまな場面の指導との連携により、さらに効果が高まると考えられる。

フェアプレイ7カ条

1. 約束を守ろう
2. 感謝しよう
3. 全力をつくそう
4. 挑戦しよう
5. 仲間を信じよう
6. 思いやりを持とう
7. たのしもう

図11 フェアプレイ7カ条



図12 フェアプレイニュース

いままではあまりフェアプレイをしていなかったなあと、思
うのでこれからは同じ試合の人や同じ競技の人と
楽しく気持ち良く全力でたたかえるようにフェアプレイを
していきたいです。

図13 学習後の生徒のふり返し

たとえ仲間
であろうとなかろうと、困っている人がいれば
反射的に手を貸すことができるというのはとて
もよいことです。自分なら、自分たちの置かれて
いる状況など、いろいろと考えよう。スポーツ
の中であつても、日常生活の中であつても、人を手助
けすることを当たり前と言えるように。

図14 学習後の生徒のふり返し

V. 今後の展望

今後、他教科との連携や国際理解教育との関連等、育てたい児童生徒像を踏まえた学校全体での整理が必要である。

引用文献・参考文献

- 1) Binder, Deanna (2007). Teaching Values: An Olympic Education Toolkit. International Olympic Committee, p.13.
- 2) Centre fur Olympic Research and Education (2014). The Olympic Education Vol.2:15.
- 3) 花岡勇太(2014). 実感をもって学ぶために ―体育行事や教科と連携した取り組み―. Journal of Olympic Education. Vol.2:p.64.
- 4) 公益財団法人日本オリンピック委員会. <http://www.joc.or.jp/>
- 5) 公益財団法人日本体育協会. <http://www.japan-sports.or.jp/portals/0/data0/fair/index.html>
- 6) 長野市校長会・長野市教育センター国際化教育研究委員会編(1999). 世界の人とともに生きる 一校一國運動の記録. 長野市教育委員会.
- 7) 日本オリンピック・アカデミー(2008). 第31回 JOA セッション：青少年とオリンピック. p.11.
- 8) 真田久・平井敏幸(1999). 一校一國運動と子供たち. JOA タイムズ 22：18-23.
- 9) 真田久(2012). 「オリンピック教育」とは何か. 附属学校オリンピック教育推進専門委員会 報告書(2011年度) 国際理解・国際平和教育としての『オリンピック教育』―Excellence(卓越)・Friendship(友情)・Respect(尊敬)―. p.8-12.